福島県立医科大学学術成果リポジトリ
FUKUSHIMA MEDICAL UNIVERSITY

「例外的」NP is when/where節およびNP is if節の用法と意味

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福島県立医科大学看護学部 公開日: 2010-05-25 キーワード (Ja): when, whereif 定義文語用論 キーワード (En): when, where, if, definition, pragmatics 作成者: 中山, 仁 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000507

福島県立医科大学看護学部紀要 第12号 1-9, 2010
Bulletin of Fukushima School of Nursing

■ 研究論文 ■

「例外的」NP is when/where 節および NP is if 節の用法と意味

中山　　仁[1)]

The Meaning and Interpretation of Exceptional *When/Where*-Clause in Defining Sentences and *If*-Clauses as Subject Complements

Hitoshi NAKAYAMA [1)]

要　旨

本論では，定義文などで用いられる NP is when/where 節（Frustration *is when you can't find the car keys*. など），および，一部の NP is if 節の形式を取る表現（The only way she'd believe it *is if she heard it from my lips*. など）の用法と意味について，特に語用論的な観点から考察する．両者は主語 NP と従属節が意味的に等価でないにもかかわらず，be 動詞によって結び付けられ，一見等価な関係を持った文として表わされているという点で共通している．これらの表現に対しては一部の文法家から標準的でないとの判断が下され，その意味で例外的なものと見なされてきた．ここでは，最近の言語資料や辞書記述などを分析することによって，これらの表現が意外にも多く使用され，その使用には特有の効果があること，また，その解釈には語用論的な推論のプロセスが関与していることを明らかにする．

Abstract

The aim of this paper is to demonstrate the actual status of the usage of certain "exceptional" expressions in English: *when/where*-clauses in defining sentences and *if*-clauses which serve as subject complements in sentences such as *The only way she'd believe it is if she heard it from my lips*. While these sentences have been criticized as nonstandard by some grammarians, current corpus-based studies reveal that they are used more often than expected because of several pragmatic properties. The following discussion shows that the corpus-based descriptions and pragmatic interpretation of these expressions may contribute to a better understanding of them and shed some light on the description of definitions in EFL dictionaries.

1．はじめに

本稿では，NP is when/where 節および NP is if 節の形式をもつ構文のうち，(1)，(2) のような一見規範から外れていると思われる表現について，その使用の実態を明らかにするとともに，妥当な意味解釈について考察する（以下，用例中のイタリックはすべて筆者による）．

（1）a．Frustration *is when you can't find the car keys*.（Wilson, 1993: 464）

b．A joint venture *is where usually two, but sometimes more, firms manufacture and sell products on a joint basis*.（BNC Online: K94）

（2）The only way his role can be clarified and his position made tenable again *is if there's a public inquiry*.（*Collins COBUILD English Dictionary for Advanced Learners*（3rd ed.）: tenable の用例）

1）福島県立医科大学看護学部総合科学部門外国語

Keywords: when, where, if, definition, pragmatics
キーワード：when，whereif 定義文語用論

受付日：2009. 10. 16　受理日：2010. 1. 5

（1）は語義説明の際によく用いられる表現で，説明の対象となる語は主語位置に置かれている．（2）は if 節が条件節として解釈される表現である．両者は be 動詞に後続する位置，すなわち主格補語の位置に節が生じていると見なすことができるという点で（3）のような自由関係詞節を含む文や，（4）のような（「…かどうか」という意味の）if 節を含む文と類似している．

（3）a. Sunday is when（= the time when）I am free.
　　b. This is where（= the place where）I live.（安藤 2005: 201）
（4） The question is if（= whether）the man can be trusted.（Swan 2005: 622）

ただし，（3），（4）では主語と補語の間に等式的な関係が成立しているのに対し，（1），（2）ではそのような関係が成立していない．さらに，（3），（4）では節が機能上名詞的であるのに対し，（1），（2）では依然として時や条件を表す副詞節として機能しているように解釈できると思われる．NP is when/where 節，NP is if 節としては（3），（4）のような表現が一般的であるので，その意味で（1），（2）のような表現は例外的な表現といえる．実際，（1）の表現については従来の語法書でも使用を避けるべきであると判断される場合が多い（詳細については後述）．また，（2）については筆者の知る限りこれまで辞書や語法書において言及されることはなかった．

ところが，このような表現は，（3）や（4）のような表現ほど多くはないものの，実際には話し言葉，書き言葉のいずれにおいてもしばしば見受けられ，筆者のインフォーマントからもごく自然な表現であるとの判断が得られた．このことは従来の語法書の判断に何らかの問題があることを示唆しており，この種の表現の用法と意味解釈についてさらに詳細な検討が必要と考えられる．

そこで，本稿では Wordbanks*Online* および BNC Online（以下，Wordbanks および BNC）から得られた資料などを用いてこれらの表現の実態を把握し，その分布と意味解釈についての妥当な説明を試みたい．[1] 以下では，まず（1）で示した NP is when/where 節のタイプの表現について，コーパスから得られた資料，および，*Longman Dictionary of Contemporary English*（4th ed.）（以下，*LDOCE4*）の記述から見出された興味深い事実をもとに使用の実態を明らかにした後，その表現が使用される根拠を語用論的観点から説明する．次に，（2）で示した NP is if 節のタイプの表現についての使用状況を把握すると同時に，主語の語彙パタンを分析し，この表現の構文的特徴について説明する．最後に，この表現の解釈も先の NP is when/where 節と同様に語用論的視点からの説明が可能であることを示したい．

2．NP is when/where 節の構文パタンと解釈

2．1．語句の定義に用いられる NP is when/where 節

前述の通り，NP is when/where 節の NP には，通常ならば時や場所を表す語句であることが期待されるが，語句の定義に用いられる NP is when/where 節の場合，主語には時や場所とは無関係の語句が来る．例えば，（5）で when/where 節によって定義されているのは「臓器提供」および「脂肪除去術」である．以下，語句の定義に用いられるこれらの表現を when/where 定義文と呼ぶことにする．

（5）a. Organ donation *is* ***when*** *a person, or their family, agrees to the removal of one or more of their organs, so that the organ can be transplanted into someone else.*
（http://www.bbc.co.uk/health/donation/flashjourney_index2.shtml）
　　b. A Fat suction, or suction lipectomy, is where a narrow metal tube is inserted through a small skin incision over a pocket of excess fat and a vacuum suction is applied.（Wordbanks: ukmags0002）

when/where 定義文は（3）のような自由関係詞節を含む文と異なる特徴をもつことから，従来はその使用については批判的な評価を受けてきた．以下では，いくつかの語法書の立場を概観し，それらの立場と問題点を指摘し，when/where 定義文についてさらに詳細な調査が必要であることを示したい．

2．2．従来の立場：語法書から

複数の語法書を比較したところ，この表現の使用については概して批判的な立場（Wilson（1993: 464）など）が多い．一部容認する立場（*Merriam-Webster's English Usage*（1994: 953-954））であっても，書き言葉では正用法として認めるまでには至っていないようである．Wilson（1993: 464）による指摘を（6）示す．

（6） …But in formal definitions, especially of abstractions, *is where* and *is when* are usually frowned on; most commentators insist on a single noun as the predicate nominative in definitions: *Hysteria is an emotion that*..., not *Hysteria is when* [*where*] *your emotions*....

上記の通り，Wilson（1993）は特に抽象概念の説明に when/where 定義文を用いるのは不適当であるとの判断を下している．

しかし,すでに（1b）と（5）で示した3例を見る限り，定義されている語句（a joint venture, organ donation, a fat suction）はいずれも（6）に例示された hysteria と同様の抽象概念と言ってよい.[2] このことから，定義される語句の種類についてさらに詳細な検討する必要があると考えられる．

次に *Merriam-Webster's English Usage*（1994: 953-954）の立場について概観する．この語法書では，多くの語法書や教科書でその使用が幼稚（childish or immature）であると見なされていることを指摘した上で，次のように述べている．

（7） The dearth of printed examples leads her [Goold Brown] to conclude that is when definitions are knowingly avoided in writing, although they are common in speech. It may be that they sound too unsophisticated (...) for written use.
（中略）
For whatever reason, it is no longer possible for grammarians and lexicographers to use the handy and understandable is *when* definition.

ただ，*Merriam-Webster's English Usage* の立場には 2 つの点で検討の余地が残されていると言える．第 1 に，(7) の前半で「書き言葉における用例があまりない」と指摘されているが，この表現の書き言葉における生起状況が客観的に示されていない．第 2 に，(7) の後半で「文法家や辞書編纂者が今後この便利で分かりやすい表現を用いる可能性はない」と指摘しているが，これについては，それ以降に編纂された辞書にそのような記述はもはや見られないのかについて検証する必要がある.[3] 前者についてはコーパスによる話し言葉と書き言葉の頻度差を確認することによって，後者については最近の主要な学習英語辞典である *LDOCE4* の記述を見ることによって明らかにすることができる．

2．3．コーパスによる NP is when/where 節の検証

when/where 定義文の話し言葉と書き言葉の使用頻度を調べるため，Wordbanks および BNC を用いて，is when または is where の語列を含む用例の中から定義文として用いられているものを抽出した．その結果を表 1 に示す（数値は用例数，（　）内は各コーパスにおける is when/where の語列の総数に含まれる when/where 定義文の割合を表す）．

表 1 から，when 定義文は is when/where の語列の総数からすれば少数ではあるが話し言葉でも書き言葉でもある程度使用されていることが分かる．特に，when を用いた定義の方が where の場合よりも多いことが明らかとなった．もちろん，Wordbanks と BNC それぞれのコーパス全体に占める話し言葉の割合は書き言葉に比べて小さいので（それぞれ約25％，10％），上記の結果をもって書き言葉が優勢であるというのは誤りであるが，少なくとも *Merriam-Webster's English Usage*（1994: 953-954）にある「書き言葉における用例があまりない」という漠然とした指摘は支持できないことになる．

話し言葉に限らず書き言葉においても，耳慣れない概念や抽象度の高い語句について説明する際にはできるだけ平易な語句や構文を用いるなどの工夫をすることが望ましいであろう．when/where 定義文とはそのような分かりやすさに貢献する表現と考えられないだろうか.(8) は Wordbanks および BNC から得られた書き言葉に含まれる when/where 定義文の例である．ここで興味深いのは，いずれの例においても 2 つの語句を対照的に説明するのに when 定義文が利用されているという点である．

（8）a．Physical dependency *is when someone has taken drugs in quantity for a time and comes to rely on the use of a drug in order to feel well and for their body to function 'normally.'*（中略）Psychological dependency *is when the user experiences an overwhelming desire to continue with the drug*

表 1　話し言葉と書き言葉の違いによる when/where 定義文の分布状況[4]

	when 定義文		where 定義文		計
	Wordbanks	BNC	Wordbanks	BNC	
spoken	12	23	4	8	47
written	12	29	5	21	67
計	24	52	9	29	114
	（4.1％）	（6.1％）	（0.1％）	（1.8％）	

experience.（Wordbanks: ukbooks0059）

b．Re-active public relations *is when you respond after a situation has arisen or an event happened*.（中略）Pro-active public relations *is when you are helping to make a situation or event happen and are keeping ahead of things*.（BNC: EVF）

定義される語句（主語名詞句）についての説明が長くなればなるほど，それを主語と同じ名詞句の形で説明するよりは文（節）の形で示した方が複雑な構造が避けられるという傾向があるのではないかと考えられる．上記の例では2つの対照的な語句の違いがより分かりやすくなるようにwhen節を並列するという表現上の工夫がされているといえる．

（7）にも述べられているように，when定義文はかつて「便利で分かりやすい（handy and understandable）」表現であり，書き言葉においても例外ではなかった.[5] コーパスにも見受けられたように，when定義文が依然として書き言葉で用いられているということを考えると，語句の定義に直接かかわる辞書の記述においても同様にこの表現が利用されている，あるいは，再び利用されるようになっているのではないかと予測するのは当然であろう．これが正しいことを示す証拠として*LDOCE4*の語義記述をあげることができる．以下では，それ以前の版（第3版；以下，*LDOCE3*）とも比較しながら，その具体例について見てゆくことにする．

2．4．*LDOCE4*（CD-ROM）におけるwhen定義の記述[6]

2．4．1．when定義文の一部を用いた語句の定義

*LDOCE4*のCD-ROMに含まれる名詞のうち，定義にwhen節が用いられているものをまず検索し，そこで得られた結果の中からこれまでの議論に該当しないwhen節（つまり，when定義文の一部であるとは認められないwhen節と，時を表す名詞の定義に用いられているwhen節）が用いられているケースを手作業で除いた結果，when定義文のwhen節による定義を含む名詞見出し語の数は678に及ぶことが分かった.[7,8] 該当した名詞の中には複数の定義にwhen節を，場合によってはすべての定義にwhen節を用いているものもあり，該当する定義数で言うとさらに約100件を加えた数に上る．該当する名詞はphone callのような比較的平易な語からhypochondria（心気症）といった難解な語まで様々である．（9）にそれらの名詞の一部を示す．また，（10）は名詞realizationの定義例で，3つの定義すべてにwhen節が用いられている．

（9）attack, blackmail, capture, coincidence, depth, dramatic irony, ellipsis, fitness, hypochondria, Oedipus complex, phone call, studyなど，計678語

（10）**realization**

1 *when* you understand something that you had not understood before

2 *when* you achieve something that you had planned or hoped for

3 *when* you change something into money by selling it

（10）で示したようなwhen節は，when定義文における主語とbe動詞を省略した形に相当するものと考えられる．このような記述は（11）の*Longman Language Activator*（2nd ed.）などにある，語の意味領域を分けるために用いられるwhen節とは異なる性質のものである．なぜなら，これらは1つのグループを構成するための場合分けに用いられるもので，しかも，示される語句の品詞も様々である．よって，語義記述と言うことはできない.[9]

（11）**chance**（一部）

WHAT'S HERE

• when sth happens by chance see 1 to 3

• when you have the chance to do sth

1 when something happens without being planned by chance, by accident, happen to do sth, as luck would have it, coincidence, luck/chance, fate, accident, as it happens

2 happening by chance

3 when things are done, chosen etc by chance

（*Longman Language Activator*（2nd ed.））

一方，*LDOCE4*のwhen節は個々の語句に対する説明として用いられている．その証拠に，*LDOCE4*内の記述には実際にwhen定義文やそれを示唆する例がいくつか見受けられる．（12）ではpositive/negative reinforcementという2つの対照的な語句の定義に用いられており，（13）ではan injection of a drugとwhen節が「=」で結ばれている．

（12）**reinforcement**

2　positive/negative reinforcement

positive reinforcement *is when you give someone praise or rewards for their behavior or work, so they want to continue doing well*. Negative reinforcement

is when you give someone punishments or criticism when their behavior or work is bad, so that they want to improve to avoid punishments again

（13）　**shot**[1]

16［C］*especially AmE* an INJECTION of a drug（= *when it is put into the body with a needle*）

このことから，*LDOCE4* による when 節が when 定義文の when 節として用いられていることは明らかであろう．

興味深いことに，このようなスタイルの記述は *LDOCE* の以前の版では行われていない．実際，上記の調査で得られた678件のうち旧版（*LDOCE3*）でも収録されている語句の定義を調べたところ，いずれの場合も when 節による定義を見出すことはできなかった．例えば，discharge（名）について *LDOCE4* の定義とそれに対応する *LDOCE3* の定義を示すとそれぞれ（14）のようになる．

（14）　**discharge**[2]

1［U］*when* you officially allow someone to leave somewhere, especially the hospital or their job in the army, navy etc

LDOCE3: the action of allowing someone to go away, especially someone who has been ill in hospital or working in the army, navy etc

2［C,U］*when* gas, liquid, smoke etc is sent out, or the substance that is sent out

LDOCE3: the act of sending out gas, liquid, smoke etc, or the substance that is sent out

3［C,U］*when* a substance slowly comes out of a wound or part of your body, or the substance that comes out

LDOCE3（該当なし；**2** の一部として取り込まれている）

4［C,U］electricity that is sent out by a piece of equipment, a storm etc

LDOCE3: electricity that is sent out by a piece of equipment, a storm etc

5［U］*when* someone performs a duty or pays a debt

LDOCE3: the act of doing a duty or paying a debt

6［U］*when* someone shoots a gun

LDOCE3（該当なし）

この事実から，*Merriam-Webster's English Usage* の下した予測（（7）後半部）とは裏腹に，辞書編纂者の中には依然として when 定義文を有効な語義記述の手段であると考える立場があることが分かる．

それでは，なぜ when 節が利用されるようになったのであろうか．2．3 節では主に Wordbanks や BNC から得られた用例に基づいて，耳慣れない語句や抽象度の高い語句の理解に when 定義文による説明が役立つと述べたが，*LDOCE4* においても同様のことが当てはまるようである．以下では *LDOCE4* で when 節による定義が用いられている語句の特徴を分析し，このことが正しいことを示したい．

2．4．2．定義される語彙の特徴

LDOCE4 の中で when 節による定義が行われている語彙にはどのような特徴があるのかを，*LDOCE3* で示されている定義と対照することで明らかにしたい．方法としては，対照される *LDOCE3* の個々の（名詞句で表されている）定義の中心語の分布状況を調べることで定義の対象となっている語彙に意味上どのような傾向があるのかを見る．ここで言う中心語とは，例えば（14）の *LDOCE3* の第1義（*the action of allowing someone to go away, especially someone who has been ill in hospital or working in the army, navy etc*）で言えば action に相当する．したがって，discharge は（14）で該当する *LDOCE3* の 3 つの（when 節に対応する）定義から action, act という意味を含む語彙と言うことができる．これに該当するすべての語彙に対して調査した結果のうち，中心語の上位10件をまとめたものを表 2 に示す．

表 2 の語を見ると，いずれも行為，状態，業務･慣習，感情などの抽象的な概念を指していることが分かる．見出し語の例をあげれば argument（行為），readiness（状態），outsourcing（業務），hostility（感情）などである．しかも，phone call や study などの平易な語彙の占める割合は少なく，全体として読み手（学習者）にとって堅い，難解な内容の語彙が関係しているようである．また，可算・不可算の観点から調べても，具体物を表す可算名詞を認めることはできなかった．

表 2 から分かるもう 1 つの興味深い点は，when 節による定義の対象となる語彙の多くが *LDOCE4* の版から新たに見出し語（主見出し）や語義として加えられたものであるということである（n/a 部分参照）．このことは先にもあげたように，耳慣れない語句の理解に when 定義文による説明が役立つということを裏付けるものと言える．

これまでの調査から，when/where 定義文のうち，特に when 定義文はその伝達上の効果のために一般に考えられている以上に用いられていることが分かった．では，

表２　*LDOCE3* の定義と対照させることによって見た *LDOCE4* の語彙の意味的特徴

	LDOCE3 の定義の中心語	左記の中心語による定義に対応する見出し語数
1	act	184
	n/a（**新見出し**）*	99
	n/a（**新語義**）	60
2	state	51
3	practice	25
4	process	25
5	situation	20
6	occasion	14
7	action/actions	13
8	fact	12
9	quality	11
10	feeling	9
	計	523

* n/a：*LDOCE4* の語義に対応する語義が新規の語彙または定義項目であるため *LDOCE3* になかったものを指す.[10]

when/where 定義文はどのように解釈されるのであろうか．これまでの議論では，この表現の簡潔で分かりやすいという特徴については述べてきたが，NP is when/where 節における NP と when/where 節との意味的なずれ（両者に等式的な関係が成立していないこと）については言及していない．そこで，以下では中山（2007）の仮説にしたがってこの表現の解釈について考察する．

2．5．when 定義文の語用論的解釈

中山（2007）は when 定義文の解釈について語用論的な解釈プロセスの介在を主張している．すなわち，NP is when/where 節の when/where 節は名詞節ではなく，基本的に「時」あるいは「場合」の意味を表す副詞節であると捉え，その意味を通して聞き手の中に思い描かれた状況から，さらに推論を働かせて伝達したい（目標とする名詞句の）意味にたどり着くという考えである．具体的には，この種の文は純粋な意味的な解釈のレベルでは「NP は…の時に.」というやや不完全な解釈がなされ，その解釈を出発点にして推論が働き，次の段階の解釈，すなわち，「NP は…の時・場合に当てはまる」に至り，さらに，個々の場合に応じて「…であること」や「…である時のこと」などと解釈が調整されると考える．このような解釈手順を取るのは，一つには，この表現が個々のケースで一定の解釈に収まらない（つまり，when 節を「…であること」という意味だけに固定できない）例があるという事実による．例えば（15a）の depth の定義では「あるテーマについての詳細を検討する時」という文字通りの意味から「あるテーマについての詳細を検討する時の，その詳細さ」（15b）は「ユーモアとは笑う時」から「ユーモアとは，笑えばそれがどのようなものか理解できる」という具合に解釈されなくてはならない．

（15）a．**depth**
3　b） *when a lot of details about a subject are provided or considered*
（*LDOCE4*）

b．What is humor ? Humor *is when you laugh.* – Earl Rovit, American Scholar, Spring 1967.（*Merriam-Webster's English Usage*, 1994: 953）

この仮説を考慮に入れて表 2 で示した結果を振り返ると，when 節によって表わされる意味は，上記のような推論を経て個々の中心語の意味へと解釈されると言うことができるだろう．

3．NP is if 節 の構文パタンと解釈

3．1．通常の NP is if 節との違い

1 節で（2），（4）の違いについて触れた通り，通例 NP is if 節の形式においては if 節が名詞節として機能し，

疑問や問題を表す主語について「…なのか（どうか）」という意味で対応する．

（16）　The question is if（= whether）the man can be trusted.（=(4)）

ところが，（17a）の解釈は，「彼の役割が明確にされ，彼の地位が元に戻る唯一の方法は，公式の取調べがあればということだ」というようなものであり，（17b）の解釈は「みんなを喜ばせることは，この試合に勝てば（したがって，勝つこと）だ」となる．

（17）a．The only way his role can be clarified and his position made tenable again *is **if** there's a public inquiry*.（=(2)）
　　b．The one thing that can make the people happy, *is **if** we win this game*.（Wordbanks: sunnow0087）

上記の解釈に従えば，if 節が条件の意味を含んでいることから，この表現は（16）のような名詞節としてではなく，条件・仮定を表す副詞節の機能を維持しているものと捉えることができる．この点において，この種の if 節は 2 節で扱った when 定義文の when 節と類似している．ということは，この場合も 2.5 節で述べたような語用論的な解釈が当てはまると考えられる．すなわち，if 節は「…であれば」という意味から「…であること」という意味に至る解釈のプロセスを認めるという考え方が，この構文の特徴を説明するものとして適切であると思われる．

ただ，when 定義文の場合と異なり，if 節の主語には独特の語彙パタンが存在するようである．以下では，この表現の生起状況と主語の特徴を Wordbanks と BNC に基づいて分析した上で，この構文の語用論的解釈プロセスについて考察する．

3．2．コーパスによる NP is if 節の検証

Wordbanks と BNC のそれぞれで is if の語列を含む用例（それぞれ428例と478例）を検索し内容を検討した．その結果，用例には当然のことながら「…かどうか」という意味の if 節や，be の後に if 節とその帰結節を含む例が見受けられたが，（17a，b）に類する構文も決して少なくないことが分かった．特に，（18）のように主語に the only を含む名詞句が現れる場合が多く，Wordbanks では該当する131例の NP is if 節のうち79例が the only N の型の主語をもつものであった．[11]

（18）a．*The only way* she'd believe it *is if she heard it from my lips*.（Wordbanks: ukbooks0070）
　　b．I think *the only reason* you should retire *is if you can find something you enjoy doing more than what you're doing now*.（Wordbanks: today0014）

そこで，the only N 型の主語に絞ってその生起状況を Wordbanks と BNC で調査した．その結果を表 3 に示す（数値は用例数，（　）内は各コーパスにおける is if の語列の総数）．

表 3 は，the only N 型に限った場合であっても，is if の語列に含まれる「例外的」な NP is if 節構文が意外にも多いことを示している．話し言葉と書き言葉の違いについて言えば，2 つのコーパスのいずれにおいても話し言葉の割合が高い．しかも，前述の通り，両コーパスに含まれる話し言葉の比率が少ないことを考慮に入れると，この表現は話し言葉での使用の方が多いと言えるだろう．

the only N における N の語彙にも一定の傾向があることが分かった．Wordbanks と BNC から得られた N の語彙の傾向を示したものが表 4 である．これによれば，way，time，reason，thing などが多く用いられていることが分かる．ここには condition などの条件を表す語彙が含まれていない点が興味深い．もちろん，the only が条件設定を表すと考えれば if 節が後続するのももっともであると言うことはできるが，この型の表現には N に only を含まない場合（one thing, one reason など）もある

表 3　the only N is if 節の生起状況

	Wordbanks	BNC
spoken	60	43
written	19	26
計	79（428）	69（478）

表 4　the only N における N の語彙の傾向

N	Wordbanks	BNC
way	45	31
time	10	13
reason	8	3
thing	5	4
exception	2	3
chance	2	1
problem	1	2
計	73	57

ので，主語と if 節との関係を説明するためのより一般的な方法を考える必要があると思われる．

3．3．NP is if 節の語用論的解釈

（18）および表4の結果から，the only を含む名詞句の意味と if 節の文字通りの意味との間には完全な等式的関係が成立していないことが確認できた．そこで，この表現についても，適切な解釈のためには when 定義文の場合と同様に語用論的解釈プロセスが関与していると考えるのが望ましい．すなわち，NP is if 節の場合は，主語の表す「方法」や「理由」の成立条件を補語位置に条件節で提示するという形式を取ることで，「NP は，…ならば，である」というやや不自然な意味から「NP が成立するのは if 節で示された場合である」という解釈を引き出すように聞き手に促していると捉えることができる．その際，選択される主語と文脈によっては（17a, b）のように願望などの意図を含めることができると思われる．if 節の意味内容が断定的でなく，帰結節が存在しないという意味で未完結な印象を与えることが聞き手に推論を促す一つの要因となっているとも言えるだろう．

4．結　　び

Wordbanks および BNC を用いた検証と分析によって，本稿で取り上げた NP is when/where 節と NP is if 節は，一般的な認識と使用実態との間に隔たりのある表現であることが明らかとなった．when 定義文については，語法書による批判にもかかわらず，その表現の利便性と理解のしやすさのために，書き言葉での使用価値が依然として高いことが分かった．このことは今後の英語辞書の記述にも少なからず影響を与えるのではないだろうか．また，NP is if 節については，これまでのところ話し言葉で使用される場合が多いためか，非母語話者の英語学習者にとっては意識（あるいは正しく理解）される機会がいまだに少ないようである．しかし，選択される主語の語彙に一定の傾向が認められることからも，学習用英語辞書などにこの表現についての情報（解釈プロセスや語彙的特徴など）を盛り込むことは意義のあることと思われる．

注

＊　本研究は平成21年度科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号20520443）による研究成果の一部である．

1．Wordbanks Online および BNC Online の各データは小学館コーパスネットワークを通して提供されたものである．

2．なお，（6）にある formal definitions の具体的な説明がないのでどのような場合を指すのか明確ではないが，Wilson（1993: Introduction, xii）が formal のレベルを edited English と対応させていることを考え合わせると，（1b）と（5）で示した 3 例も edited English に含まれるので formal と見なしてよいだろう．

3．通時的に見ると，18-19世紀頃は when/where 定義文は効果的であるとして全く問題のない表現と見なされていたようである（The 18th-century grammarians and their 19th-century imitators clearly found nothing wrong with is *when* and *is where* definitions.（*Merriam-Webster's English Usage*（1994: 954））).

4．サブコーパスの分類に従えば話し言葉と書き言葉を比較した結果は 7 : 17であるが，書き言葉の資料の中に話し言葉の用例が含まれているので，実際には12 : 12となる．

5．A Solecism *is when the rules of Syntax are transgressed.* – Alexander Adam, *Latin and English Grammar*, 1772（*Merriam-Webster's English Usage*（1994: 954））

6．*LDOCE4* の when 定義については，既に中山（2008）で検討されている．この節の議論は，それに基づいてさらに詳しい検討を加えたものである．

7．「when 定義文の一部と認められない when 節」とは次のような語義に用いられている when 節，すなわち，通常の時を表す副詞節や形容詞節を指している：used when saying what is bad about a person or situation or what causes problems（trouble[1] 第 2 義）/ a mistake when you are working on a computer, which means that the computer program cannot do what you want it to do（error 第 2 義）.

8．*LDOCE4* の CD-ROM には，他の辞書すなわち *Longman Dictionary of English Language and Culture* の語彙も収録されているが，今回の調査で後者のみに含まれる語彙が該当したのは 1 件だけ（Marxism-Leninism の解説内の dictatorship of proletariat について）である．

9．ただし，このようにして分類された各々の語句の定義において用いられる when 節は when 定義文の一部と認めることができる．例えば，kill の中に分類されている euthanasia（安楽死）の定義は when someone who is very ill is killed in order to stop their suffering となっており，これを Euthanasia is when someone who is very ill is killed in order to stop their suffering. としても差し支えないと思われる．なお，euthanasia については Wordbanks において when 定義文が用いられている例を見ることができる．

10．これを *Oxford Advanced Learner's Dictionary*（7th ed.）など他の辞書で対照させた場合も act を初めとして表 2 で示された語を用いる場合が多くを占めた．

11．その他の主語としては the best thing, the biggest benefit などの最上級を含んだものや，what is to be criticized などの wh 節が比較的多かった．

参　考　文　献

The American Heritage Book of English Usage.（1996）. Houghton Mifflin, Boston.

安藤　貞雄（2005）『現代英文法講義』開拓社，東京.

小西友七（編）（2006）『現代英語語法辞典』三省堂，東京.

Leonard, S. A.（1929）*The Doctrine of Correctness in English Usage, 1700-1800*. University of Wisconsin Studies in Language and Literature: No. 25, Madison.

Merriam-Webster's Dictionary of English Usage.（1994）Merriam-Webster, Springfield, Mass.

中山　仁（2007）「補語位置に生じる副詞節の用法と解釈プロセス―定義などに用いられる when/where 節に関して―」『英語語法文法学会第15回大会予稿集』49-56.

中山　仁（2007）「*Longman Dictionary of Contemporary English* 第 4 版における when 定義についての語用論的考察」『福島県立医科大学看護学部紀要』10，1-8.

Quirk, R, S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik.（1985）*A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, London.

Swan, M.（2005）*Practical English Usage*, 3rd ed. Oxford University Press, Oxford.

Wilson, K. G.（1993）*The Columbia Guide to Standard American English*. Columbia University Press, New York.